



春は名のみ 潮の花飛ぶ

春を待つ心は北国に住む人々にはことさらのものがある。新年を迎えてから割と安定した天候に恵まれ、このままでは済むまいと思ながらも一日よければ一日もうけと過ごしてきた一月でありましたが、寒中最後に寒波襲来、それでも寒行の大きな音はご苦労さまと思いたくもピリッとした寒気の中でな



マンションピアからカミに向かってシャッターを切った。このような写真になるとは思いもよらなかった。一見、寺泊の海岸通りには見えない。寺泊の町並も捨てたもんじゃないですね。

月刊 第 523 号

いと似合わない。そして豆まき、立春と一歩つつ春への歩みの中六日には寺泊会が四十五周年の記念の集いを賑々しく開催。三上会長を筆頭に若がえった役員の方々のチームワークで趣好をこらした設営。思えばまだ戦後の混沌の中で発足、苦勞をくり抜けて来た郷土人の親睦と集団就職等で上京した若者達への激励など初代会長小林源次郎氏から田村元嗣氏、石垣作一氏、古川原實氏と受け継がれ五代目へバトンタッチ、已に三氏が故人となられ、共に苦勞された役員の方々も故人となられ又お年を召されて、静かに世代交代がなされる中その志は脈々とついでついでとてきている。

当日は新潟県人会、分水町東京会、弥彦東京会から代表が出席され、町からは高橋町長、田村議会議長、島田総務課長が出席、ふるさとだよりから中村、関川琢道老が出席した。

先ず故人となられた方々への黙禱で総会が開かれ、記念大会では三上会長の挨拶に次いで高橋町長から町の近況と今秋計画の客船「飛鳥」での佐渡一周クルージング参加への呼びかけ各来賓の挨拶のあとふるさとだよりからも一言お祝いを述べさせて頂いた。

初代会長はふるさとだより発行の提唱者でもあり、東京会とふるさとだよりは持ちつ持たれつ形の形で歩んで来た歴史があり今回で五百二十三号の発行となっ

た。初期は主に町外の方々から友人となって支えて来て下さったのですが近年は町内の誌友も多く御後援志で発行を維持できる状況で有難いことであります。裏方として御苦勞下さった小川さんが昨秋若くしてお亡くなりになられ大変残念なことでした。これからもささやかながらふるさとからの便りを送りつづけたいと主筆窪沢氏共々努力してゆきたいと思っております。

特に各地寺泊会は人間の結びつきが稀薄になってそれが社会歪めてゆく原因ともなっている今、新たな意味合いを持つのではないかと思われます。是非郷土人の結びつきの輪を広げて



右手の建物は寺泊漁業協同組合。見慣れた風景も躊躇して見ると又変わった貌を見せる。宇宙船から見た地図作りが話題になっているがどんなものが出来るのであろうか。

何やら固い話題になってしまいましたが、話のついでに「ナンド」と言う魚の話を見せて頂きました。実は私もそんな名前が魚は初めて聞いたのですが、ベテランの漁師でも結構名前の分らない魚があるのだそう、最近特に水温の変化が潮流の加減か見たこともない魚が獲れるのだそうで、「この魚は何だ？」と言うと「ナンド」らこてや、え？だすけナンドらこてや。見たことのない魚は総じて「ナンド」と名づけられるのだそう、それこそナンドと言うお話であります。成る程了解であります。

ここところ荒れつづきで、二月十五日の涅槃会（お釈迦さ

まの団子撒きを境に春が近づくと言われておるのですが、今年はこの日を境に今冬一番の寒波となつて、どれ程積る雪ではありませんが風は西になつたり北になつたりと微妙に変化しながら吹雪を誘つております。

こんな日は熱帯が恋しいもので一杯やれば酔いにかかせて色々思い出されることも多いようで、冬はもっぱらハンカケや人間を台にしての転回、石段をゴザボシを敷いて滑べり下りたり山の町の坂は竹スキーの格好のスロープで葉を煮やした近所のバアチャンに灰を撒かれて悪態つきながら退散、次は雪玉をこねて塩を噴かせたりミカンの皮で色をつけたりでぶつけ合い、強い玉は

大事に雪に埋めて翌日の対戦に確保、そんな繰り返しの中で厳しい冬を貧しい中にも楽しみながら耐えたことなど、少し春めいてくると、町中あちこちで道路に凍固まった雪を唐鍬で割って江川へ流したことなど次々になつかしく思い出されてきます。

少し成長してからは百人一首など盛んで宿をして下さる家へあちこちと寄せて頂きました。

ストーブなどない時代で炬燵と火鉢の暖房で、熱が入ると炬燵など入る暇もない程で帰り際に頂く熱い甘酒の味など今となれば何やらほろ苦い思い出となつて帰りの道のヒューンヒューンと鳴る電線の音さえ空耳となつて聞こえてくるようになります。

扱て今、町では自治省の外郭団体「財団法人地域創造」の補助を主財源として「地域伝承芸能等保存事業」として寺泊の伝承芸能の映像記録保存の準備が進められている。町に伝わる「塩たき節」「万歳の若水」「越後追分」の三つの民謡をもとに、その発祥と伝承の軌跡を探りながら寺泊の歴史を訪ねてゆこうと言う試みである。

NHK水曜日の民謡の時間を担当している竹内勉さんが「ふるさと」のうた 誰が守る。ここに住む人 気がついた人」と言う言葉をかけて指導を願った折残して下さっている。

遠い昔より伝えられてきた芸能には、先人が求めた様々な願

いや、情緒豊かな人々の暮らしとして懐かしい故郷の原風景がある。今に生きる私達にとつては心の拠り所でもある。

ところが、時の流れと共にその姿は薄れ、やがては消えて行く運命にある芸能も数多くある。

先人が伝えてきた芸能こそ、かけがえのない寺泊の文化そのものであり、今、私達には郷土の文化、伝承芸能を次の世代に手渡す責任があります。

幸い町には伝承活動をしていくつかのグループがあり、今回は浜ッ子会と伝承講座の受講生の皆さんが二月二十六日のビデオ撮り本番に向けて練習を重ねていきます。

「塩たき節」

(前唄) 昔より 寺泊名物の塩たき踊り
 (本唄) なじよな塩たきでもこしろて出せば
 枝重ね小柳 稚児桜
 女波男波を
 汲み分け見れば
 今日月こそ桶にあり
 ハアヤランヤレヨイ

「越後追分」
 櫓も櫓も 波にとられて
 身は捨てはてて 小舟よ
 何処へとりつく島もない
 よくも染めたよ 船頭さんの
 厚刺 やらさのえー
 腰には大船 裾に波 背な
 端の紋どころ 質には入れて
 も流りやせぬ

四月には郷土資料館開館予定



開宴の乾杯をする古川原名譽会長。
 已にあちこちで話はずみ始めており、おしゃべりは乾杯のあとでこゆつくりとの一言も飛び出した。



同世代のグループの集っている卓で談笑する高橋町長。
 あれやこれやと子供時代のこと話はずんでいように思われる。



三浦孝七郎一門によるアトラクション。追分は勿論のこと尺八演奏あり、民謡あり、歌謡曲ありと一芸に秀でるとパリエーションも多い。

良寛師の詩歌の心に思う

野積荒谷 井木 清

家は荒村に在りてわずかに壁立し
し転展備作してしばらく時を過
ごす憶い得たり晴昔行脚の日
衝天の志気敢て自ら持せしを
三十年近く岡山泉玉島の円通
寺や諸国での修業を終え、帰国
してから、良寛師は何ヶ所かの
庵に住まわれた。



一方は荒波打ち寄る日本海、
一方は僅かに草の茂げる丘陵地
の佇びし所。
詩の趣は、国上ではなく郷本
でのものよりである。
当時は佇しい村にあって僅か
に壁があるだけの小屋だ。(中
略)あちこち人から施しを受け
て廻りしばらく時を過ごした。
一人暮らしの良寛師村々を廻
りて托鉢行脚すれども喜捨がい
つもあるとは限らず三度の食事
でもまならぬこともあったこと
である。又子供等のいたすらや、
悪罵嘲戯がいたる処に、特に故
里家郷周辺には多かつたと思
はれる。曰く予首者(先達者)は
家郷に入れられずとか。石もて
追われる如し。

しかし悟りの道に至りし良寛
師、百も承知のことであつたで
あろう。虎は死して皮を残し、
人は他界転移して名を残すもの
か。
(参考文献 良寛詩歌百選 谷
川敏朗著 もう一人の良寛 高
見澤和夫著)

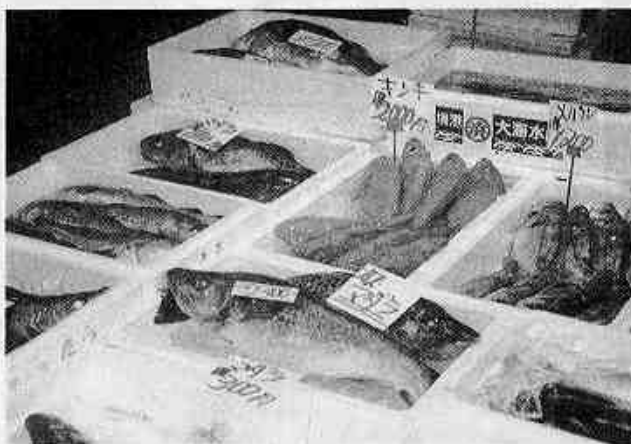
寺泊冬の魚事情

寺泊の冬の魚と言えはかつて
はタコ、タラと言ひのが通り相
場であつた。
大物は二十キロを越えるタコ
は正月には是非食卓に乗せたい
一品であり、煮ごこりとなつた
タラの煮付けはなんともしなつた
い冬の味覚であり、出雲崎おけ
さには「タラの味噌汁雪見酒」
の一句が唄いこまれていた。
しかし近頃は何と言つてもア
ンキモ、アンコウ鍋に人気が集
中しているようだ。
今迄あまり値のつかなかつた
アンコウが脚光をあびて、各旅
館、ホテルでも冬の特別メニュー
を組んで鍋料理を宣伝している。
プロの間では水温が一定のと
ころまで下るとタイは餌に付か
なくなると言ひのが尋常とされ
て来たのだが、素人相手の釣舟
がその常識を覆えして冬場もタ
イ釣りには挑戦、思いもよらぬ超
大物(七キロ級)が釣れてその
情報が大東方面からもマ
ニアが乗り込んできている状況。
四べージの写真は四キロのタ
イを子供達が大喜びで持ち上げ

ているもので十二月下旬の漁果
である。水温の変化によるもの
かその分正月前大事な時期に期
待のタコがさつぱり年が変つ
てからようやく獲れ始めている。
甘エビも人気食品で運が良け
ればピンピン跳ねている物に出
合うこともある。マダラの白子
のボン酢等グルメ指向は益々エ
イカカレート。何か珍しい物はな
いかと鶴の目薫の目、人間の食
への欲望は果てしない。残念乍
ら寒鰯の噂は未だ聞かない。

経費後援

- (敬称略・順不同)
- 東京都 三上喜久治 金壹万円
 - 下鳥 ハル 金三千元
 - 秋山 文枝 金三千元



東京	小泉栄美子	金三千元
都	田中トシ	金五千元
〃	小黒正夫	金五千元
〃	笹平京子	金三千元
〃	樋口田鶴	金三千元
〃	納谷トシ	金三千元
〃	水戸十一郎	金三千元
〃	田中澄江	金三千元
〃	本間静栄	金五千元
〃	渡部作次	金五千元
〃	滝沢初子	金三千元
〃	白井フシイ	金三千元
〃	田口ハル	金五千元
〃	池田タキ	金五千元
〃	丸田タツノ	金三千元
〃	松本典子	金三千元
〃	八木美也	金二千元
〃	小林リヨ	金二千元
〃	神田恰子	金二千元

新潟市	天野吉司	金三千元
寺泊町	山崎順治	金三千元
〃	外山四郎	金三千元
〃	能登洋一	金三千元
〃	平井松雄	金三千元
〃	前田コト	金五千元
〃	久住洋一	金三千元
〃	長谷川一成	金三千元
〃	川端レウ	金三千元
〃	竹内孝太郎	金三千元
分水町		
寺泊小波会二月句會詠草		
兼題	立春・息白し他当季	
立春や	能登 頑牛	
沖見る漁夫の遅しく		
春立つや	水沢 蕉子	
越中よりの置葉		

春立つや 中村 流瓢
 風紋の襲深きまま
 町川の 小島 温石
 濁りの清みて春立ちぬ
 立春の 外山 海子
 やさしさ庭に降りてみる
 朝市は 大越碧水子
 饒舌もあり息白く
 駆け来る子 竹内 雀山
 迎うる女皆息白し
 客を呼ぶ 小島 冬扇
 揃いの法被息白し

末の子の 小形 美代
 母にも言ふ息白し
 鮫鯨の 江原 汀子
 骨だけとなり時化続き
 海鳴りの 斎藤 紫苑
 轟く丘に椿咲く
 寒鴉 矢尻ゆきを
 村の名前は七ツ石
 地吹雪の 外山きよし
 原を抜け来て家並の灯
 露味噌の 加勢 白汀
 味それぞれに家伝あり
 三月句会兼題 春風・雛祭

あとがき

東京寺泊会では寺泊大和田出身の内山清さんが名を連ねる江差追分家元三浦孝七郎一門の皆さんによるアトラクションが雰囲気盛り上げ、外れクジ無しの抽選会も楽しい試みであった。賞品には魚沼産コシヒカリもあり、高橋町長に米が当たった。これはふるさとだよりの記事になりますねと冗談で言っていたら本当に米が当たって一同爆笑、勿論早速同世代の御婦人にプレゼントされた。

同席の来賓の方々からは、寺泊会は仲々活気があって羨しいですとの感想を頂いた。愈々の会の発展が願われる限りである。地方の時代と言われ、その地域の文化や環境を大切にしながら特徴ある町づくりが指向される今、伝承芸能の映像化が実を結び、元寺泊中学校が資料館として四月開館に向けて準備が進められ、海の玄関口中央埠頭に「ふれ合い広場」が誕生する。それぞれ楽しみである。

毎月二十日発行
 寺泊ふるさとだより

誌代税共(百円)
 編集人 一中 村 興 樹
 発行人 一保 沢 泰 忍
 発行所 新潟県寺泊町
 ふるさとだより
 郵便番号 九四〇一二五〇二
 ダイヤル局番 〇二五八七五
 電話 二〇二九番
 振替番号 〇〇六〇三三七四五
 印刷所 吉野印刷株式会社